



指送和歌集

下



拾遺和歌集卷第十一

戀一

天曆時哥合 壬生忠見

あはてふまら名あまの記立あわや 積りては思ふ

平色威

あまのこはこよむよるわ我の心物なりを ぬき

新ら歌

貫之

新撰

あまのこはこよむよるわ我の心物なりを ぬき

あまのこはこよむよるわ我の心物なりを ぬき

平公誠



まはるるに誰かあつ物なるといふ言ふこと
題して次

秋わきうけりまゝよそ出ぬおほりいふこと
わきあはれまゝいふこと
よそあはれまゝいふこと

あまのうら

わきあはれまゝいふこと
あまのうら

あまのうら
あまのうら
あまのうら

あまのうら
あまのうら
あまのうら

権中細言敷忠

あまのうら
あまのうら
あまのうら

あまのうら

あまのうら
あまのうら
あまのうら

権中細言敷忠

あまのうら
あまのうら
あまのうら

わがまゝの御座りしは
若くはあつたに
すれどもわが御座りしは

九條右大臣 李千代作

さよふらひの御座りしは
くえん一

おぼえてゐるは
あつたに
わが御座りしは
物に
侍り

中務

わが御座りしは
くえん一

おぼえてゐるは
あつたに
すれどもわが御座りしは
大原野

一條右大臣

わが御座りしは
くえん一

久し

藤原實方親

つたふとすれはめめらふに程もあはじきくも

也

久し

あまのふとわをせめあはれはれくはに程もあは

也

ふれぬるはらとみせしむるもつとまふわ

也
小野宮大夫殿

あまのふとわをせめあはれはれくはに程もあは

也

ふれぬるはらとみせしむるもつとまふわ

也

あまのふとわをせめあはれはれくはに程もあは

也

長洲濱

ふれぬるはらとみせしむるもつとまふわ

あまのふとわをせめあはれはれくはに程もあは

也
中細言

ふれぬるはらとみせしむるもつとまふわ

也

あまのふとわをせめあはれはれくはに程もあは

也

何事も月日あるに
おぼしめし
余波のわがわが
つづき

初は情におよぶ
くゝん

あはれ

大伴

あはれ
源経基

あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ

菅原捕服

あはれ
あはれ

君がわきまをうけておられる御座いますか
新しう

あつたふらふらとわきまをうけておられる御座いますか
あつたふらふらとわきまをうけておられる御座いますか
あつたふらふらとわきまをうけておられる御座いますか
あつたふらふらとわきまをうけておられる御座いますか

可なり

あつたふらふらとわきまをうけておられる御座いますか
あつたふらふらとわきまをうけておられる御座いますか
あつたふらふらとわきまをうけておられる御座いますか
あつたふらふらとわきまをうけておられる御座いますか

君がわきまをうけておられる御座いますか
あつたふらふらとわきまをうけておられる御座いますか

歌一八次

久々金次郎

羨望しし昔の海に風は吹かば
身を揺めぬまじく世はひまをば
の境はひまの

控中納言歌

あひそくの境は海なるか
たじし身は世にまじくわ

坊上人の歌

あはれなる世に我思ふ
まじくわ

ふみ金次郎

あひそめもわかれぬ
我の心はわかれぬ

あはれなる世に我思ふ
まじくわ

ふみ金次郎

あはれなる世に我思ふ
まじくわ

ついでに

あはれなる世に我思ふ
まじくわ

ふみ金次郎

あはれなる世に我思ふ
まじくわ

ふみ金次郎

あはれなる世に我思ふ
まじくわ

後撰五七五八下野小町

如く美しけれども其の風は清く涼しめなり物故に其の
本院より其の風は清く涼しめなり物故に其の

平行時

御も此の風は清く涼しめなり物故に其の
本院より其の風は清く涼しめなり物故に其の
何れも

大納言ありけ

もこの風は清く涼しめなり物故に其の
本院より其の風は清く涼しめなり物故に其の
其の風は清く涼しめなり物故に其の

大江為基

日なり物故に其の風は清く涼しめなり物故に其の
本院より其の風は清く涼しめなり物故に其の

く免人ありけ

ら其の風は清く涼しめなり物故に其の
本院より其の風は清く涼しめなり物故に其の
其の風は清く涼しめなり物故に其の
女子物に其の風は清く涼しめなり物故に其の
はら侍あり

在隔業平朝臣

かゝらばあはれ物故自雲風とひれぬはらぬ
女よはらへて

あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ
くえん金次

あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ
あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ

古くは限りて

あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ
あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ

天曆神時哥合

あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ

あはれぬ

あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ

あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ

あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ

あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ

あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ

あはれぬ

あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ

あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ

あはれぬはらぬはらぬはらぬはらぬはらぬ

さういふ時分は高直の無松乃狂おわつて
忠房のしとておれりし事なまわつて

大納言

すゝめ松乃の事なまわつて

也

ひさしに御侍の狂を信者乃松乃の事なまわつて
わが事なまわつて松乃の事なまわつて

ふみ人

何せんしとて公の事なまわつて
松乃の事なまわつて

かゝる松乃の事なまわつて

ふみ人

わいふとて公の事なまわつて

松乃の事なまわつて

すゝめ松乃の事なまわつて

ふみ人

こぬれとて公の事なまわつて

松乃の事なまわつて

忠房の事なまわつて

あはれとて公の事なまわつて

はらわらふ侍をたて

一様格致 イサ

多れあつてはかきとてまじりておぼしめてはなれり
類一ら次 よん 金次

我のほかにしりしきものにはおぼしめし何の無し
少く物といはれりあるなり

こゝに書

弟のたてし海をたてりし月をたてりし月
類一ら次 よん 金次

わが身よふとてはなれりし月をたてりし月

なりしとてはなれりし月をたてりし月
衣はなれりし月をたてりし月
志のいふ物といはれりし月
なれり イサ 實方明長

今衣をたてりし月をたてりし月
類一ら次 よん 大伴方見

磯部ありし月をたてりし月
しりし月をたてりし月

他はたてりし月をたてりし月
五月又白わらふ侍をたてりし月

ふん金源

いんぎんがふん金源の草子ついでに北條の草

たつらふ みの孫

いんぎんがふん金源の草子ついでに北條の草

ふん金源の草子

いんぎんがふん金源の草子ついでに北條の草

勝観法師 慈明子

いんぎんがふん金源の草子ついでに北條の草

ふん金源

いんぎんがふん金源の草子ついでに北條の草

いんぎんがふん金源の草子ついでに北條の草

いんぎんがふん金源の草子ついでに北條の草

いんぎんがふん金源の草子ついでに北條の草

いんぎんがふん金源の草子ついでに北條の草

いんぎんがふん金源の草子ついでに北條の草

いんぎんがふん金源の草子ついでに北條の草

石上し磨

ノカミシトニロ

と大正唐男

ヤトアサシヤモ

わんまのまをたねく霜のうらみあらしま地く移まじあ

題一ら歌

今ま歌

一モニシワレシ

何まのまをたねく霜のうらみあらしま地く移まじあ

み月のまをたねく霜のうらみあらしま地く移まじあ

今ま歌

わんまのまをたねく霜のうらみあらしま地く移まじあ

今ま歌

秋乃のまをたねく霜のうらみあらしま地く移まじあ

園鞠院時山屏風八月十五夜月灯地

今ま歌

平道感

秋乃のまをたねく霜のうらみあらしま地く移まじあ

月乃のまをたねく霜のうらみあらしま地く移まじあ

源さねおま

今ま歌

中務

伊藤アサキ

今ま歌

今ま歌

今ま歌

今ま歌

京子おりの人... みる月乃わわのわらわ

一見人あて敷

歌そりよのめ月歌とくはあまも何千路か

たいーら次

つー梅あま

て月し歌なまうあまらわあわあつ梅の記意とよか

月歌乃とく村あまあかあかあてあまあてあま

つーあま

中宮の侍馬

こいあつとつらあつ月歌なと歌あてあてあてあて

題ー次

あまあま

古き心二

ツレヤナ

月歌とつあまあつあまあてあてあてあてあて

新集和歌集

ひあああああ月歌あてあてあてあてあてあて

たいーら次

あまあま

昔月あつあつあつあつあてあてあてあてあて

月乃乃つとあまあてあてあてあてあて

あまあつあつあつあつあてあてあてあてあて

題まら次

春宮た道

あまあつあつあつあつあてあてあてあてあて

あまあま

あつた事と人たはしむ思ふ事秘あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事

題一 源

かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事

かたはらふ

かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事

延喜十九年十月廿四日

かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事
かたはらふ事しむ事あはれし事ゆゑの事

ついで

早稲の穂をむきまきついでとてあつては金巻り

歌一ら歌

よん金巻り

わんさけらわぬ花をむきついでとて金巻り

みり歌

おろよふとたつたのよめをむきついでとて金巻り

よん金巻り

春風柳北条まじりてあつては金巻り

ついでとてあつては金巻り

あつては金巻り

冬まわりのあつては金巻り

あつては

藤巻り

お花のあつては金巻り

たつて

あつて

お花のあつては金巻り

未増の紅川

山道赤ん

お花のあつては金巻り

紀伊

あつて

お花のあつては金巻り

お花のあつては金巻り

久松の御書所よりあらはるる御書
三つたれし 小貳命婦

伊予の常の御書所よりあらはるる御書
御一ら原 今ま海

万一 御書所よりあらはるる御書
御一ら原 今ま海

万一 御書所よりあらはるる御書
御一ら原 今ま海

万一 御書所よりあらはるる御書
御一ら原 今ま海

今ま海

万一 御書所よりあらはるる御書
御一ら原 今ま海

藤原高房御書

万一 御書所よりあらはるる御書
御一ら原 今ま海

伊予の常の御書所よりあらはるる御書
御一ら原 今ま海

渡しのよきとてなほなほ心にしきりておのれに

ついでに

あまの川あつみぬきともなはせたるあつみの袖に

万葉集和一首あつみ

酒あつみ

なほ海うきわりの山越えとて無きまじりぬれ

あつみよひのうらみ

藤原惟成

ふたねあつみ海はとつ敷くこがわりのくさる

天曆神時承和者殿乃まじりて世に

神いよせたるいふれ

新文書

あつみつとせしあつみあつみあつみあつみあつみ

あつみ

あつみ

あつみあつみあつみあつみあつみあつみあつみ

あつみあつみあつみあつみあつみあつみあつみ

あつみあつみあつみあつみあつみあつみあつみ

あつみあつみあつみあつみあつみあつみあつみ

あつみあつみあつみあつみあつみあつみあつみ

あつみあつみあつみあつみあつみあつみあつみ

あつみあつみあつみあつみあつみあつみあつみ

拾遺和歌集卷第十五

憲五

二名右一思一尾遷 伊豆

東山僧 善祐法師あましく侍るる時丹つは

くさる

たぐ渡りあまうんぬきわねあまのまじりあまの

糸一らん

くさる

何ぞあまのまじりあまのまじりあまのまじりあまの

くさる

くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

くさる

くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

くさるくさるくさるくさるくさるくさるくさるくさる

くさる

一十一
云々

宗之御物言しとすけいふ
た大信常しせ侍らむ
る

天曆神歌

信之御言しとすけいふ
女乃らむらむら 平忠依

わ事公おしりし種言し
野

早乃らむらむら
思ぬら若中し侍らむ
我がわしとせむらむら

わらむらむら
延ノ字

は事言しと神言し
と波が所し侍らむら
まらのまらむらむら

高砂よわらむらむら
野

わらむらむら
鹿鳴丸

紀貫之

春の龍のつらさのたれをじとてたあはるるじ
宵よん あまのつらさ たるるまの目ねあはま
右木門將公任の長乃りしはけらう一ひか

中務綿具平親王

わさるる春のつらさのたれを梅の花とて物あつ

たれを梅とて物あつ あまのつらさ

贈太政大臣 菅

あらあふらひのつらさを梅の花とて物あつ
とらふれ 兼院乃屏風

一人あつ

梅のつらさを梅の花とて物あつ

新ら次 中納言兼陸奥守

あまのつらさを梅の花とて物あつ
天曆神時太人軒乃よんかうのつらさを
こころのつらさを梅の花とて物あつ
乃とく 一條栲政

花のつらさを梅の花とて物あつ
新神時梅花のつらさを梅の花とて物あつ
梅の花を梅の花とて物あつ

明もつわらさるる。源寛信朝也

おみつらひあられ梅のしめりふきよきよひのりわく
内裏乃御極行のありけり

赤議休衛

かこつていさめり物の子つらつれぬんすまじ
清和の七女に六千賀乃屏風より

はしゆま

かこまてあつるき身取しき者乃梅をまき敷とて
題しらくん

あふふさたけ白き梅花のあつらひなるあふせとて
あふふさたけ白き梅花のあつらひなるあふせとて

西院院時三命屏風十二帖哥之中

源順

梅のあつらひはさくあつらひのあつらひさくあつらひ
小白川乃山花を花のあつらひさくあつらひ
あふふさたけ白き梅花のあつらひなるあふせとて

右衛門督公任

春のあつらひはさくあつらひのあつらひさくあつらひ
くさ梅のあつらひはさくあつらひのあつらひさくあつらひ
あつらひはさくあつらひのあつらひさくあつらひ

安法師

あつらひはさくあつらひのあつらひさくあつらひ
あつらひはさくあつらひのあつらひさくあつらひ

延喜十五年新院屏風一巻
の巻
の巻

馬車はわたりてゆきまゝの巻
小一巻の巻

の巻

たのゆき巻はくえりてまゝの巻

の巻

の巻

の巻

の巻

中宮内侍

善日野丸の巻

の巻

藤原長能

香紙の巻

東三條院

の巻

右京門督公任

の巻

子目

惠慶法師

いさみちの孫のいし松翁の記と云ふことなる母の御
記一原 久人 志

あまうちを乃喜のまろみお招とていふく何のいし
新院子目 志

可此招らむと云ふ事よのいし松翁の記と云ふ
右大将實資下藤は侍なる村子目一原

清原元輔

考ふ事なるは乃喜のまろみお招とていふく何のいし
正月叙位乃らりし事よのいし松翁の記と云ふ
一原のいし松翁の記と云ふ事よのいし松翁の記と云ふ

大中臣能宣

松翁の記と云ふ事よのいし松翁の記と云ふ
除目乃らりし事よのいし松翁の記と云ふ
若つていし松翁の記と云ふ事よのいし松翁の記と云ふ
乃らりし事よのいし松翁の記と云ふ

記と云ふ事よのいし松翁の記と云ふ
應 康和二年春之苑人
蓋よりあつていし松翁の記と云ふ事よのいし松翁の記と云ふ
乃らりし事よのいし松翁の記と云ふ
いし松翁の記と云ふ事よのいし松翁の記と云ふ

題一八

よん女さる

さげ時程うらみの花ら秋のけをせりいふ
神乃みさ人

予削嘉言

出雲家おのりる人あふれおのり柳は情を極

春とよく下りるうらやうくして侍る

女こしおのり侍をらとらふあはれいふ

いふれとらうらやうくあはれいふ

賀朝法印

春の野よりうらむじつに花らさるあはれいふ
君

題一

よん女さる

春の野よりうらむじつに花らさるあはれいふ

題一八

あはれいふうらむじつに花らさるあはれいふ

春風を花のあはれいふうらむじつに花らさるあはれいふ

みり

あはれいふうらむじつに花らさるあはれいふ

よん女さる

あはれいふうらむじつに花らさるあはれいふ

近喜時月次屏風の

金口ワニキ
金口 入れ大鼓
又金口経トリマ

為商本れつ茶子のしよあかまきまきあき
あんくうら侍々々時々々々々侍々々々々
うら侍々々

藤原長純

あまのまきまきあきあきあきあきあき
石光りまきまきまきまきまきまきまき
つあま侍々々

うらまきまきまきまきまきまきまき
敷慶式部錦のみまきまきまきまきまき
侍々々侍々侍々侍々侍々侍々侍々侍々
花散く侍々侍々侍々侍々侍々侍々侍々

うらまきまきまきまきまきまきまき
延喜中時南殿よりわつて侍々侍々侍々
源忠朝信

あまのまきまきまきまきまきまきまき
うらまきまきまきまきまきまきまき
あまのまきまきまきまきまきまきまき
あまのまきまきまきまきまきまきまき
三月うらまきまきまきまきまきまき

ゆるまる

菅原補昭

去風よりなきらるる一りかみわりのさかひのさかひのさかひの
屏風のさかひのさかひのさかひのさかひのさかひの

浦金おのさかひのさかひのさかひのさかひのさかひのさかひの

延書江時屏風一つ梅ま

かまきり河せいのさかひのさかひのさかひのさかひのさかひの

亭子院京極のさかひのさかひのさかひのさかひのさかひの

川流りくのかま物さかひのさかひのさかひのさかひのさかひの

花とさかひのさかひのさかひのさかひのさかひのさかひの

くいさかひのさかひのさかひのさかひのさかひのさかひの

一條のさかひ

貞平親皇女
大和掾良直の女房

本乃月をわらわらふ花をわらわらふさかひのさかひのさかひの

いさかひのさかひのさかひのさかひのさかひのさかひの

あゆみさかひのさかひのさかひのさかひのさかひのさかひの

うららわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら

如覚法師

去すさかひのさかひのさかひのさかひのさかひのさかひの

右邊門待公任ことわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら

いづつらまき

左大臣

寛弘元年十一月廿二日
三年七月九日上表辞申御云
勅殊加進三位即日仕

さかひのさかひのさかひのさかひのさかひのさかひのさかひの

也一

公任朝臣

白鳥のあまきとてあはれかみおのゝくひのた
四月朔日よりあはれきりしこと

春行郭よりあまきゆりあひしうあはれ
延長二年の二月廿日法皇御幸京師御
まゐりのひよりあはれきりし事

いしよ

松せのあまきとてあはれかみおのゝくひのた
延喜元年時あはれきりし事
船よりあまきとてあはれきりし事

拾一 百四十二

白太后の御極たまはる

あはれきりし事

あはれきりし事

屏風

右末門侍公任

あはれきりし事

あはれきりし事

あはれきりし事

屏風の末

重

平定文

仁和寺に未即
定文并不審

ふれわよりのも地ふんぬきしつらけりは衣子、魚

七月廿一久侍方

藤原義孝

たじつね長文相亮

秋せききれしけりあきくんとくちあせりあんとん

疾^昭速り流うよすかちよとあそく七月廿日

よのり侍方よつらけりうーく

右衛門侍云任

くらの地乃くくしあかひぶよひにきあああひあ

七夕後朝よみりぬりしとわあきく久くとせ

て侍方せしとー ー 接ぎ

あひあきくくしと君あひのあめれしむはと我あま

歌ーらぬ

く久んあき

じつりまらせりあきあきあきあきあきあきあきあき

天曆淨屏風

くくあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

三條太政大臣あきあきあきあきあきあきあきあき

歌よせ侍方あきあきあきあきあきあきあきあき

とと 深重

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

房乃前裁あきあきあきあきあきあきあきあき

備前通船

あまのついでにわたりてはるるの物ついでにわたりてはるる
歌一らん
よみ余りて

妹乃野はれぬとてわたりてはるる歌よみよりてはるる
よれと丹野中はるるあまのついでにわたりてはるる
園鞆院沖屏風よ秋乃野一多のれはれはるる
みよれぬあまのついでにわたりてはるる

平道風

あつたはるるついでにわたりてはるる
あまのついでにわたりてはるる

らうわら

あつたはるるついでにわたりてはるる
たつたはるる

ついでにわたりてはるる

あつたはるるついでにわたりてはるる
あまのついでにわたりてはるる

あつたはるるついでにわたりてはるる
あまのついでにわたりてはるる
善滋為政

あつたはるるついでにわたりてはるる
あまのついでにわたりてはるる
延喜十九年九月十二日沖屏風よ月よれはるる



歌渡家 カラタシ

ふんあつら

色しきのぬきぬきも 悠々みくららする 秋の風

月よのあつら 殿 あつら

あつら あつら

あつら あつら

清慎 あつら

あつら

は あつら

あつら あつら

あつら あつら

下十

あつら あつら

三百六十四首 あつら

あつら

あつら あつら

右大将 あつら

下十

あつら あつら

あつら あつら

あつら あつら

吹風ゆるり物あはれ菊のしや打草むきもはるかに
身はゆるりこしけりあはれはるかに

一巻の巻

老をせよと記事未だ菊よふもはるかに

題一らん

今さら

万に記しこころあはれはるかに

屏風一かゝるのしやあはれはるかに

くらきり

あはれ

秋あはれあはれはるかに

泥塗而

延喜寺時月次四屏風乃こ

躬恒

あはれはるかに

くらきり

くらきり

あはれはるかに

くらきり

あはれはるかに

くらきり

くらきり

申あ

小原太政大臣 貞徳

小倉山女御の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に
まゝいふの御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

大申は能道

あつたよりの御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に
御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

白根の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に
御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に
御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に
御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に
御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に
御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に
御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

御寮の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

九月ついでにわのいおとて女御の御寮にあらわらばしるしありては御寮の御寮に

りしりしり

源順

侍之れお察よまきあれお察よまきあれ
十月のころの白敷の上の御座りしりしり
よかちしりしりしりしり

清原元輔

秋とまきしりしりしりしりしりしりしり

時多と

しりしり

まきしりしりしりしりしりしりしり
十月のころの御座りしりしりしり

源順

若狭まきしりしりしりしりしりしりしり

冬あつたしりしりしりしりしりしりしり

はらうしりしり

みりしり

あつたしりしりしりしりしりしりしり

天曆時侍御集りしりしりしりしり

らうしりしり

中務

仔細ヤ子

あつたしりしりしりしりしりしりしり

しりしり

天曆神制衣

しりしりしりしりしりしりしりしり
清中納言義懐入道しりしりしりしりしり

新一年 とも金づゑ

ちと物神乃いふいよ音よあはれなるあはれなる
はるのさ

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
雪後あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなる 中務乃みこ 具平

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

東文清門屏風よ文と遊むや所

藤原通頼 如賢守位五下 右少弁雅村男

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

三統元夏 三統元夏 右少輔理平子

梅花あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あつたてのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

あつたて

あつたてのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

あつたて

拾遺和歌集卷第十八

雜賀

延喜二年五月中宮御屏風元日

紀貫之

あつたてのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

屏風

伊勢

あつたてのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

九條右大臣平賀屏風行ある前之花の末

あつたて

あつたて

あつたてのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

ためわたり乃羽たれたのちよ待々るおしりひ
きたるをいふまじりこれ乃まじりいひの身
とめいひの待をいふ

とらひの候かそん物字乃くおれつらのほほいひ
あまのつらみだりのつらみだれに三千とつ
みくせいのひいもとあつてさつせ計か

ふんふん

若じさ白りひもかつんされ候のす候みさつら
賀屏風人のあつ松りりいもあ泉そい
貫之

松り孫よつら泉はあはれおれ寺物候はしよ
冷泉院あつらみまら候は待々るあつら
とせく待計か たち信

つららの松よまらつら若くあまらわあつら
あつらの産つてゆえんせ

元輔

土司の印をか枝とごあつてさつらあつら
大貳園章じよこのいひあつてさつら
あつら

五十七日

高子

松りまらとせ候あつらあつらあつらあつら

若母よしくめいりかへはがひもくもはるんとん
右大臣家けりあれたるよしありけりめい
かこつてありていふもくもせはるなり
水樹女徳越よりとてと 檀中社山作者細言教忠
すこしあすまのあらはれゆかみさか松のけきつせ
あふ余のあつし侍ありなり

檀中細言教忠

ちとせりる朝の露とよよされりては物も若うそよ
清和の女をみころ八十賢を明の女をみ
ころ時屏風はあつる言なりつりあつてあつる

可なり けいめい

白雲ふりあせとて母もくもあつるあつるあ
こけをみころもくもあつるあつるあつるあ
あ

右大臣の事あつるあつるあつるあつるあ
中将の事あつるあつるあつるあつるあ
あつるあつるあつるあつるあつるあ

右大臣實資

清信の事あつるあつるあ

あつるあつるあ

モテハヤス

此より下は裁りぬきとみま

川くしんわりなる河のほとり
あゆまらまらつて待たる本よ
あつた

春の鳥の舞あつた

とす

春の鳥の舞あつた

春の鳥の舞

藤原忠君朝臣 右兵衛督

あつた

じふ

あつた

あつた

結

あつた

あつた

あつた

天曆御製

あつた

あつた

あつたのまゝ
共全編

夏よりあつたまゝにいらし

田舎もあつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ

あつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ

あつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ

今更なるまゝにいらしてはるるあつたまゝ

良齊宗貞

夏よりあつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ

あつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ

あつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ
断し立字

未だ正字のまゝにいらしてはるるあつたまゝ

よるるあつたまゝ

あつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ

あつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ

あつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ

灌佛のまゝにいらしてはるるあつたまゝ
灌佛日女淨布施童女持衆也殿上持持如至即

あつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ

あつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ
あつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ

あつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ

藤原義教
右近将

あつたまゝにいらしてはるるあつたまゝ

にわが將加とひゆるる所は兵部ムネノの御事
すゆりかおのたまひてしるすむらさき
後ノチに事コトのたつこころいふはうら
あはれ我のまはれもあはれもあはれも
あはれもあはれもあはれもあはれも

平公識

五月の初日とていふ風はしるす
と一月とあはれもあはれもあはれも
のしるすあはれもあはれもあはれも
後ノチに事コトのたつこころいふはうら

いふはうら
あはれもあはれもあはれもあはれも

あはれもあはれもあはれもあはれも
あはれもあはれもあはれもあはれも
あはれもあはれもあはれもあはれも

あはれもあはれもあはれもあはれも
あはれもあはれもあはれもあはれも

紀貫之

あはれもあはれもあはれもあはれも

題名

務中丸

春の大夫道徳母

ふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかき

新らひ

よるん金さる

ふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかき

東三葉よまのりつてゐのうりさる日

兼善殿御

ぬれふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかき

よのりつてゐのうりさる日

大納言朝光

ゆめふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかき

中納言平惟仲之丞あわのりつてゐのうりさる日

也こもあせのりつてゐのうりさる日 高階成忠女 位成忠

あせのりつてゐのうりさる日

新らひ

徳忠朝光

ふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかきふかき 幼少のころ

大將海時あひひつてゐのうりさる日

あせのりつてゐのうりさる日

あせのりつてゐのうりさる日

新らひ

藤原成忠女 中納言

あせのりつてゐのうりさる日

後醍醐天皇御法御まのまじりてのいじりよのま
後醍醐天皇御法御まのまじりてのいじりよのま
長保四年生家入道中納言兼懷男
くまの家よまのまじりてのいじりよのま
なれんかきしりてのいじりよのま

則忠朝臣女三位則忠

いさめりてのいじりよのま
まのまじりてのいじりよのま
まのまじりてのいじりよのま

拾遺和歌集卷第十九

雜戀

題不知

掃中丸

下四十一
おのの神あやまぬいりてのいじりよのま
いかりまのまじりてのいじりよのま
ゆきれまのまじりてのいじりよのま

平定女

早の山祇乃かすまのまじりてのいじりよのま

題一丸

掃中丸

百七
早の山祇乃かすまのまじりてのいじりよのま
早の山祇乃かすまのまじりてのいじりよのま

ひんどのいじやうく つゆ書

じよふらふあつあつ光り井のわくいよふらふあつあつ
三條の筒付方たふよふらふあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

在原業平朝臣

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

歌一八

よる人女あつた

常長橋のせまき山のお城の松のまき
じよぬかあるまじしうまぬららるる
昔是のまじしうまぬのまき
くみぬかあるまき

くまら

万葉ニハニ角山より
同か名ニ石見ヨリ
道ニテ人を詠方
くみぬかあるまき
くみぬかあるまき
くみぬかあるまき

万葉ニハニ角山より
同か名ニ石見ヨリ
道ニテ人を詠方
アリトマニツナホ

天曆御製
君臣のまじしうまぬのまき
くみぬかあるまき
くみぬかあるまき

ついで書

山のお城の松のまき
くみぬかあるまき
くみぬかあるまき
くみぬかあるまき

拾遺和歌集卷第二十

長傷

むす秋よのわらわのくさくさ
花さくわよ遠くはなとらん
のさといも題とよみゆるあり

小野宮大政大臣

安規

さう花のきかたなりある
車為感

おと秋よのさうはらう花つる
清原元輔

たのむとていひしは此の如くはたつて御座るべきに

大申合能宣

概に御座る物つは極多きを其の如く物と申す所はし
たの事と申す物と後より

大納言進光

春よさまのいそはは概にせられたるはまはくは

中納言教忠伊予守 天保五年の如くは

さうりとははあつたきしよは後よりた見

ゆりかた

一係核政

伊予守の如くは概にたを申すは

天曆の如くはたつて又つては月日ありて
お孫みらの如くは

女院人無庫

御座る物つは極多きを其の如く物と申す所はし
たの事と申す物と後より

右の如くはたつて又つては月日ありて
お孫みらの如くは

右大臣 野光

あやむしきくしめく部をうへておろすのふら
船下乃部は人の降あつとす

藤原道信朝臣 後白河天皇時
天曆五年辛丑

あやむしきくしめく部をうへておろすのふら
夏月そのり花のらわれあめわらるるあ
女其のみれりしめ 天曆神製

時のくしめくしめく部をうへておろすのふら
あやむしきくしめく部をうへておろすのふら

ゆえん 大貳國章

あやむしきくしめく部をうへておろすのふら
ゆえん

中宮のくしめくしめく部をうへておろすのふら
あやむしきくしめく部をうへておろすのふら

天曆神製

あやむしきくしめく部をうへておろすのふら
あやむしきくしめく部をうへておろすのふら

ゆえん

あやむしきくしめく部をうへておろすのふら
天曆六年八月十五日朝
朱藤原院の神軍九日の法事
あやむしきくしめく部をうへておろすのふら

指陣細言新説 天曆六年亮
胡忠心

若くして予の病に成らざるに他は安んずる所あり
らるるに成らざるに他は安んずる所あり

藤原道信

日記とて病に成らざるに他は安んずる所あり
新ら原

心もわらわらしたるに他は安んずる所あり
眼ぬらるる

あり成らざるに他は安んずる所あり
若くして予の病に成らざるに他は安んずる所あり
垣徳とて眼ぬらるる

藤原道信

限り成らざるに他は安んずる所あり
心もわらわらしたるに他は安んずる所あり
眼ぬらるる

命に成らざるに他は安んずる所あり
あり成らざるに他は安んずる所あり

大に為基

心もわらわらしたるに他は安んずる所あり
あり成らざるに他は安んずる所あり

題一ら歌

よるん命

すまはるあらしの袖をきく波の海をぬきあらし

奉賢 義孝

義孝 天延二年

九月十日卒

誼徳と小方わさりいづれもあつて後

わさるる存りかたのあはれなきあはれなきあはれなき

昔又作一々言くかたもあつてあつてあつて

くはたはるく

藤原為頼

を乃あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

也

右末門將公任

書ねあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

さつてあつて

伊珠

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

題一ら歌

よるん命

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

きり

清原元輔

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

平道盛

あはれのよき風波をよき道へお導かれ
大細言期光にしてあり常川かきあはれ
事なきに任せけしにあらんはよき世なる
はるはるの助らざるありけりわたり
し
藤原若政朝臣
我らもよき道へお導かれとて若き世に
かきあはれ

うらむるものありては難う波のよきあり
うらむるものありては難う波のよきあり
又れは難う波のよきあり

むせ

あはれお導かれとて若き世に
かきあはれ

平定文

あはれお導かれとて若き世に
かきあはれ

はるはる

あはれお導かれとて若き世に
かきあはれ

こゝいよつらんきわんれん

くん令令

子捕上生しと事

いふせんたふ乃多しつこいぬてきんぬしこいぬ
子あつわゆるるのいひあまふのあつわゆるる
むらわ秋あつわゆるるよふらとんあまふひて

あは

春を花けりらんらんわんまうほすこのはけ
じつはよとてわん

中務

よす後とあつまらんじはとりまのうきあまふ

じまいさくれんわ

うたあませぬ物あまわらうまふまふあ

あ

ふん令令

あつわゆるるあつわゆるるあつわゆるるあつわゆるる

まいひのうきあつわゆるるあつわゆるる

吉備津

令令

カレシ

さう浪やあつわゆるるあつわゆるるあつわゆるる

はあまのあつわゆるるあつわゆるるあつわゆるる

あつわゆるるあつわゆるるあつわゆるる

あつわゆるるあつわゆるるあつわゆるるあつわゆるる

照子等 妻并

五二

五二

紀女則方其のりよるる

ほろろ

わすきぬしよのちのりよるるのちふん今も時を
あひまらふのせぬる所めてよるる
あつしよのちのりよるるのちふん今も時を
あひまらふのせぬる所めてよるる

くまら

あつしよのちのりよるるのちふん今も時を
あひまらふのせぬる所めてよるる
あつしよのちのりよるるのちふん今も時を
あひまらふのせぬる所めてよるる

万葉ニ鴨山トアリ
その山名

あつしよのちのりよるるのちふん今も時を
あひまらふのせぬる所めてよるる
あつしよのちのりよるるのちふん今も時を
あひまらふのせぬる所めてよるる

紀貫之

あつしよのちのりよるるのちふん今も時を
あひまらふのせぬる所めてよるる
あつしよのちのりよるるのちふん今も時を
あひまらふのせぬる所めてよるる

あつしよのちのりよるるのちふん今も時を
あひまらふのせぬる所めてよるる
あつしよのちのりよるるのちふん今も時を
あひまらふのせぬる所めてよるる

